

特 250

377

一ト 第十四輯

盛り返して来た財界

廣島・鎌田憲吉商店



始



特 250
377

鎌田レポート (第十四輯)



盛り返して
来た財界

広島 鎌田憲吉商店



目次

盛り返して来た財界

- 一、好材料の續出て東新を先驅に大飛躍……………(一)
- 一、貿易界の好調は事業界活躍の反映……………(七)
- 一、金融緩漫と低金利に般盛を極める起債界……………(三)
- 一、農村インフレの進行、勞銀一億、低資二億四千萬圓……………(二七)
- 一、百二十パーセント暴騰の蠶絲界……………(三〇)
- 一、明朗な鐵鋼界各社一齊に黒字増配……………(三四)
- 一、我世の春を謳ふセメント界……………(三九)

盛り返して来た財界

好材料の續出で

東新を先驅に大飛躍

景氣はどうか、いつになったら恢復するだらう、などといつてゐる間に財界の動向を表相する東新株は、二百圓大關門を難なく突破して、今や一途本年一月の最高値二百二十九圓を目標に進行の途上にある。何が斯くせしめたか、財界は如何なる方向をとつて進んでゐるのか、取引所は財界のバロメーターだとされてゐるから、この指針は如何なることを示してゐるか、株式市場について調べて見やう。

現在の不景氣の始まりは、大正九年三月の反動來からで、爾後時に多少の浮沈はあつても、大勢は悪化の一途であつた。即ち低落また低落、市場さへ立てれば株式は暴落の一路を辿り、好景氣時代一株で五百圓も七百圓もした東株が、一波毎に崩れて二百圓を割り、百五十圓を割り、更に百圓を割つた。大株とても同様で、かうした不景氣で苦しみ抜いてる時に、金解禁さへすれば景氣はよくなる。解禁までの辛抱だから緊縮しろ、節約しろと當時の爲政者が緊縮を説いた。國民は景氣さへよくなることならと、政府の言の通り緊縮々々と只管に緊縮に努めたのである。

斯くして愈々解禁となつたのだから景氣は本當に恢復するのかと思つてゐると、中々以て恢復どころの騒ぎではない。益々悪くなつて新東は只の八十七圓、新鐘五十五圓といふ記録的安値だ。東株市場は全く手も足も出なくなり、二億圓のシンデケートなどいふ途方もない話の出たのも此の時である。當時の有價證券の時價を見ると、僅か二百十

八億で、一株五十圓拂込の株式が、平均三十七圓六十錢といふ惨めさであつた。

然るに其後の状況を見ると、昭和六年十二月犬養内閣の成立した時が新東百三十九圓八十錢、新鐘七十七圓九十錢となり、犬養首相が兇變に逢つた七年五月が新東百五十二圓、新鐘八十九圓七十錢であつたが、七年十二月のインフレ景氣織込みの活躍相場は、一躍して新東二百四圓九十錢、新鐘百二十五圓十錢、全國有價證券の時價は東京株式取引所の調査によると二百七十一億七百萬圓となる。

従つて之を金解禁直後に於ける最安値に比較するならば、新東の値段に於て八十七圓のものが二百圓を突破したのだから、ざつと二倍半の昂騰であり、新鐘を見ても五十五圓のものが、百二十五圓であるから、これ亦二倍半近い騰貴である。

以上は東株市場に於ける花形株といはれてゐる、新東及び新鐘について見たのである

が、その他の所謂雑株、一般事業會社株もこれと畧同様の状態を示してゐるのであるから、有價證券全體としての騰貴率は蓋し非常なものであらう。

◇

◇

是に依つて之を觀れば、有價證券の市價から見た景氣は、相當の好轉を示してゐるといふことが出来る。只相場には氣持の問題が左右するところがあるので、物の値上りが豫定の如く行かぬか、或は豫定に反して暴落するかすると、實勢と離れて沈んだり、悲觀したりするのが人情である。新東株が百三十圓、百二十圓、百十圓と續落してゐる時と、八十圓臺のものが、九十圓臺になり百圓臺となつた時とは、株式價格としては、未だ前者の方が高いのであるが、人心は後者の方が遙かに落付きを示してゐる。

同様に犬養内閣が出来て、それ政友會の積極政策で好景氣になるぞと言ふと、それだけで實際にも好轉し、次いで齋藤内閣で非常時豫算が成立してインフレーションだと言

へば、忽ち新東二百圓と来る。併しながらインフレーションもはか／＼しく進展せず、膨脹政策も思はしくないとすると、十億以上の赤字公債の發行を眼前に見せつけられてゐても上がらぬばかりか、本年一月を最高として幾分の低落を示したまゝ、爾來多少の曲折はあるとして大体から下げもならず、上げもならず、殆んど保合状態を持續して上げたい相場が、アメリカの經濟事情や、ロンドンの經濟會議だのといふ大問題に抑へられ上げられずにゐた。

◇

◇

五月末に至り、日米會商の結果、親米熱の頓に昂まれる折柄、アメリカのインフレ景氣はいよ／＼再燃し、近時全米市場の株式をはじめ棉花、小麥その他の重要商品は一齊に好調を呈して居り、米日爲替の回復もドルの反落以上にアメリカ物價の昂騰によつて逆に好影響を受ける結果となり、生絲、綿糸を筆頭に内地の重要商品も漸次擡頭し、特

に新滿相場の新高値に續いてシカゴ小麥の暴騰によつて内地新小麥は相當の高値好賣行が豫想され、今後インフレの進行に伴れての物價高、低金利の深刻化、上半期各事業會社の増配増益、配當金の再び證券化、支那時局の好轉等内外の好材料續出山積したるため、五月三十日相場は俄然新東二百圓の大關門を突破して近來の新高値に暴騰し、いよ／＼一月の最高値二百二十九圓六十錢を目標に買氣は漸増し、他の諸株も之に續いて招伴高を示したが、何にしろ八十圓臺までに落ち込んだ新東が、二百圓のところ居るといふことは、正に財界の好轉を物語るものであつて、大に盛り返して來たものといふことが出來よう。

尙先般の株高に對する日銀當局の意向は次の如く極めて樂天的である。

一、米國のインフレ政策はいよ／＼徹底し金約款も廢止され、商品株式は連日騰貴してゐること

二、北支の形勢は順調に進み、近く解決が豫想されてゐること

三、石井、ルーズベルトの會商も頗る圓滿は行はれ、日米の經濟的立場はいよ／＼緊密になつたこと

等により好感で極めて根據あり、いはゞ實質的に日本經濟の好轉を示す強材料であるから之を昨年末の暴騰に比すると、インフレ人氣で貨幣價値の低落見越しから株式熱となつたものとは、全くその趣きを異にし、通貨政策運用によつてこれを抑止する必要はないといふのである。

貿易界の好調は

事業界活躍の反映

我國金再禁止後のインフレ政策が、漸次財界を明るい方へ導きつゝあるは確だ。その

最も代表的な現れは證券市場に見られるが、次では對外貿易である。

日本の貿易は、歐洲大戰終熄後累年巨額の入超を續け、戰時中溜込んだ二十餘億の正貨は、忽ちの中に十五億、十億と減つて行つた。その後濬口内閣の緊縮政策、金解禁等によつて、國際貸借の不均衡は大に修正され、稍バランスを採り得る状態を呈したが、かゝる貿易の改善は極めて消極的のもので、詰り極端な緊縮政策の結果、輸入の激減によつて得られたバランスであり、輸入の激減といふことは、我國の如くその大部分が原料品である關係から見れば、それはとりも直さず事業界の沈衰、財界不況といふことであるから、如何にバランスが採れたからとて、かゝる状態を以て容易の改善とは實は稱し難いのである。

然るところ一昨年末の金解禁以來、この状態は全く一變した。最も昨年度の貿易も上

期中は爲替相場の先安見越、並びに關稅引上見越等によつて、輸入旺盛を極めた結果、二億六千萬圓といふ巨額の入超を示し、再禁景氣來の豫想を裏切るかの感もあつたが、下期に入るや圓價の低落により、輸入は阻止せらるゝに反し、輸出は非常な進展を示し特に綿製品並に雜品等が、圓安の潮に乗つて洪水の如く海外諸國に流れ出し、輸出品中の大宗たる生絲は各種の關係でさのみ伸びなかつたが、一方人絹輸出の増大がこれに代つた爲め、結果下期に於ける總體の輸出増加は、上期の巨額な入超を殆ど取り返し、朝鮮、臺灣の植民地を除いた内地だけの貿易尻は、先づトントンに終つたといふやうな状況である。

本年もまだ上期の數字は勿論ハッキリしたことは判らぬが、今日までの経過に於ては大體順調である。それも年初來二三ヶ月の間は聯盟、對支問題等の國際關係不安から、

原料品輸入の手當が急がれた上に、昨年秋頃の内地財界の好勢に乗じて行つた輸入約定品が、ドシ／＼這入つて來て、毎旬二千萬圓内外の入超を續けたので、一時は可なり悲觀もされたが、それも大休三月末を以て入超最盛の峠を越し、また米國の恐慌も一部で豫想されたような悪影響も來たさず、一月以來五月上旬頃までに於ける成績は、輸出五億五千八百十一萬三千圓、輸入七億五千七百六十萬九千圓、差引入超一億九千九百五十八萬六千圓で、前年同期に比し輸出は一億七千九百七十八萬二千圓増加、輸入は一億五千七百五十萬八千圓の減少で、入超額も二千二百二十七萬四千圓の減少を示してゐる。

尤もこの輸出入の金額に於ての前年同期比較は、圓價の居所が昨年と本年とは著しく相異があるので、貿易の實勢を見る上に於ては聊か當を得ないが、單に國際貸借の上から言へば、入超額が減じたゞけ好轉したものと認めて差支へなからう。

◇

◇

右の様な次第で金再禁止や、インフレ政策に伴ふ圓安の波に乗つて、本邦品が餘りに海外各市場を荒し廻るところから、最近著しく各國の御機嫌を損し、特に英帝國のブロック政策の結果として、英領印度への本邦品輸出は、單に人絹、綿布等の主要品ばかりでなく全面的に閉ざされんとして居り、埃及も亦日本の綿布を目標に、關稅の引上げを決定した外、目下開催の世界經濟會議に於て、その議題の一つたる貨幣問題討議の結果我國の貿易上にどんな影響を及ぼすやうな結論を見るか、四圍の情勢は必ずしも前途を樂觀せしむるものゝみではないが、然し今日の國際情勢は、經濟問題を切り離して取扱ひ得るものではなく、極めてデリケートな國交問題に直ちに影響する危険があるから、各國と雖もあまり無茶な日本壓迫は出來ない。

倫敦會議の結果如何は勿論これからの問題であるし、對印、對支の關稅問題にしてもその實施までにはなほ相當交渉の餘地が存するのであるから、一概に悲觀するのも早計

である。

然りとすれば貿易關係に於ては、既に今日までの好勢が、財界一般に種々の好影響を與へたばかりでなく、この上期全体の成績についても、有力な當業者の豫測によれば、前年同期に比較し金額に於て、輸入は二割一分六厘、輸出は四割八分四厘の増加と見込まれ、貿易額のかゝる膨脹は、事業界の活躍を反證するものであるから、財界に對しても今後一層の期待をかけてもよいかに思はれる。

金融緩漫と低金利に

殷盛を極める起債界

七年度後半からの匡救豫算の實行によつて金融緩漫、低金利等起債有利の條件を備へて、起債界の活況を見るべきは、つとに本誌上に於ても豫想したところであつたが、本

二年第四半期に這入つてからの活況振りは、遙かに豫想を超えたものであつた。

それといふのは過去三四年間の異常な金融梗塞から起債市場が全く閉ざれてゐた爲めである。蓋し近年に於て起債の賑盛を見たのは昭和三年の上期末から下期の中頃へかけてであつて、當時特融の放出から金融は非常な緩漫を呈したが、財界不況で普通の貸付としての新資金の需要は殆どなかつた爲め、一時社債類は大持てであつて、後年問題を起した單名手形の割引も、多くはこの當時に行はれたものである。

◇

◇

その後資金が内地市場を見限つて、海外投資に向ふに至つて、金融の基調は漸次革まり、且不況の深化、金解禁後の財界不安等から投資警戒を呼び、一般起債市場の如きは全く閉鎖されて、極めて特殊のものだけが發行されたが、利率七分以上、期限は地方債五七年、銀行債は二三年といふ有様であつた。之では事業界の立ち行く筈がない。この

苦境を轉換に導いたのは云ふまでもなく一昨年末の金再禁である。

その實現を一部では昨年下半年中に期待したが、それは思つた程ではなかつた。勿論當時に於ても匡救資金の放出、預金、郵貯の利下げ等環境の有利な展開によつて、弗々社債類の發行は見たが、社會情勢の不安や國際關係懸念に累されて、長期投資への警は戒一掃されず、起債界は僅に長い冬眠から覺めたといふ程度にしか過ぎなかつた。

然るに本年に這入つてこの狀況は餘程改善され、特に國際聯盟脱退、熱河問題解決以來は、投資人氣の上に著しい變化を來して起債界は頓に活況を呈した、今興銀調査による本年一月以降四月までの社債、地方債の發行狀況は左の通りである。

▲地方債

(單位千圓) (前年比較増減▲印減)

月	金額	利率	金額	利率
一月	二六、八七七	五、五二三	二五、四二五	▲〇、〇六五

二月	六〇、〇五八	五、四九九	三三、一八一	▲〇、〇一六
三月	三三、三五六	五、四七二	二二、八〇五	▲〇、七六一
四月	二二、五〇四	五、四九一	一七、八六六	▲〇、六一一

▲地方債

一月	二五、〇〇〇	六、〇〇〇	三三、〇〇〇	▲〇、一〇〇
二月	八五、三〇〇	五、九〇九	六〇、三〇〇	▲〇、〇九一
三月	二〇、二七〇	五、七二四	一五、二七〇	▲一、二八六
四月	五四、〇〇〇	五、七二六	二四、七四七	〇、五一一

以上の如く前年同期に比し、發行金額は増加しその利廻りも低下してゐる。尤も右統計の利廻りは地方債、會社債共にその全体の平均利廻りであつて、地方債の中には預金部引取等の特種發行により、一般市場によらず、自然市場利率とは非常にかけ離れたものも含まれて居り、また會社債にしても或る特殊關係から發行された高率のものが交つてゐるので、その平均率は必ずしも妥當でないが、これによつて概況を知ることが

出来るのである。

◇

即ち大勢としては昨年に比し、地方債は五七年のものが十年以上に延長され、利率も六分臺から五分三、五厘に低下、會社債は期限七年乃至十年となつて、利率は七分臺から六分に下つた。勿論社債類のこの程度の期限延長は歐米のそれに比較すればまだ短期物の域を脱しないのではあるが、一時に比較すれば著しき改善であり、また起債の繁盛もその殆ど全部が舊債の借換であつて、新規資金の需要が起つてのそれではないら單にこれだけを以て、財界が明朗な方に轉じたとは云ひ難いかも知れないが、起債條件の有利なことは、それだけ資本利子の負擔軽減となるのであるから、少くとも事業界好轉の一要素が充されたことは事實である。

農村インフレの進行

勞銀一億、低資二億四千萬圓

農村の景氣好轉を云々するはまだ多少早いかも知れないが、然し昨年來政府の救農政策の施行に依つて、農村は長い窮乏のどん底から多少生氣を吹き返し、新局面を展開せんとしてゐる。即ちそれは農村インフレーションの進行である。

農村の景氣好轉の徴候は、群小農産物に於ては未ださほどでもないが、主要農産物である米、殊に繭、生絲の價格騰貴にあつて明に示されてゐるが、今昨年の六十三議會以來農村救済と銘を打つて現れ出た一聯の農村インフレーション政策の全貌を數字的に示して見よう。

農村に對するインフレの展開は、一般財界と關聯して低金利政策に基くものであるが農林省を主體とする直接の農村インフレは大體次の二方向に分れる。即ち一つは政府事業で、膨大な農山漁村土木事業、農村經濟更生施設等、所謂時局匡救豫算の中核をなすもの、他の一方は各種匡救低利資金の放出で、信用組合固定貸付の流動化を目的とする國庫補償中央金庫特融案その他救済低資の莫大な放出である。

所謂時局救農土木事業は、農閑期を利用して農村に各種の土木事業を起し、農村の過剩勞力を吸収し、勞銀の形で直接農民に現金を與へんとする所謂直接的な購買力補給案である。事業の種類は、開墾用排水灌漑、暗渠設備、荒廢林地復舊、林道開設、小漁港修築、船溜造成、牧野改良、桑園の整理改植等で、農、山、漁村の各方面に亘り何れも將來は生産力をも増加せしめるものである。

七年度事業費總額は六千八百十二萬圓、從業勞働者は延人員で約七千五百萬人、八年

度の豫定は、七年度より更に擴大し、事業費總額は八千四百三十萬圓、從業人員延數が九千九十九萬人といふ尨大な數字であるが、兩年度を合計すると、事業費で約一億五千三百萬圓、從業人員延數で約一億七千萬人に上る。そしてこの事業費總額の約七割五分から八割が勞銀として、地方農民に支拂はれる事になつてゐるから、兩年度合計して約一億圓を超える現金収入が農村を賑はす勘定で、中々馬鹿にはならない金額である。

時局匡救低利資金の放出も七年度から、八年度にかけての總額は、近年稀れな巨額を示して居り、七、八年で放出される政府低資は、農林省所管に於て合計二億四千萬圓に上つてゐるが、その中樞は産業組固定貸付流動化特融で、之は七年から九年にかけ、一億圓融通されるわけであるが、初年度の七年は極めて成績良好で、豫定の二千五百圓を全部特融し終つてゐる。

更に本年七月から実施豫定の農村負債整理組合法では、今後五年間に二億の低資が農村に流れ出るわけで、今から農村待望の的となつてゐる。その他農村の預金部資金、元利支拂資金、高利債借替資金等、色々の名目で農村に流れ出る金は大したものである。此等の莫大なる資金放出が政府の宣傳通りうまくいつて、農村の各種機關の滑油となり、活潑なる活動を捲起し始めたなら實に大したものであるが、それ程でないにしても農村の景氣は、今後この方面からのみでも好轉を示すであらうと觀測されてゐる。

百廿パーセント暴騰の養蠶界

絲價の値上りて繭價も昂騰

長らく不況に喘いでゐた財界も、近來數多くの事業が著しく活況を呈し、この分なら悲觀どころか一層の好轉をさへ豫測されてゐる方面もある程となつた。我輸出貿易の大

宗たる養蠶業も昨年六月滯荷絲の政府買上後、需給の改善と、爲替安によつて急速に好轉したが、最近では米國の金本位停止に伴ふ大インフレ見越して、アメリカの諸商品は例外なしに暴騰し、金より物への運動が高調に達した關係で、生絲の如きは去る四月十九日ルーズヴェルト大統領が金本位離脱を打明するや、俄然紐育市場は十五乃至十七ポイントの暴騰を示し、一日の騰り高としては全く未曾有の事態を現出した。



過去二ケ年に於ける四、五、六、三ヶ月の絲價を見るに (單位百斤圓)

	(六年)	(七年)
四月	五九七	五三四
五月	五三一	四七三
六月	五二七	四六三

となつてゐるが、之に比し今年はどうかといふに、四月の平均は現物七百二十八圓で、

同月の最高相場は八百二十圓、最低相場でも六百四十圓となつてゐる。五月に入つても騰勢は依然變らず下旬七百七十八圓を往來して居り、此の八百圓揃みの相場は、遠でからず、千圓臺にまでとどくであらうと言はれてゐるのであるから、一二年前の昨今に較べたならば、三百萬圓見當の大飛躍をしてゐる勘定である。

尤も絲價が四千圓前後もした大正八九年頃や、恐慌前數ヶ年の千三四百圓時代の事を思へば、此の程度の恢復は知れたものである。然し乍ら兎にも角にも昨年下半年以後順調に強調を辿つて來た斯業は、一方に生産費諸掛りの著るしい低下といふ好條件に恵まれてゐるので、既に確定したアメリカのインフレに伴ふて愈有利に展開するであらう。



斯の加く絲價昂騰に恵まれたのは製絲家だけではない。兩三年來窮境のドン底に喘いで居た二百萬戸の養蠶家にも、今年はしばらく振りに春が廻つて來た。毎年の繭産額は

九千萬から一億貫内外で、これが價格は五年以降は三億圓内外であるが、今年は前記のやうに絲價が以外に高値を持續してゐるが、沼津初繭初市は驚く勿れ稀れなる出來榮へで、買放し四十三掛と出來絲量十二匁として計算すれば、貫當り五圓十六錢の値段となる。この相場は昨年の二十一掛二圓五十二錢に比べたら正に百二十パーセントの騰貴である。

昨年の繭産額中春繭は四千六百四十萬貫の一億一千九十九萬圓であるから、今年は春繭だけで、全國養繭農家の懐に去年に比し、一億圓近い金が餘計に轉り込むわけである。而して繭の生産費は三圓五六十錢と見れば充分であるから、平均四圓五十錢に賣つても一圓は確實に儲らうといふもの、養蠶は農家にとつて唯一ともいふべき現金収入の途であるが、その養蠶から今年は一舉に倍額の収入を納めるのであるから、大したもののでその一億圓以上の大金が再び如何なる徑路を辿つて農村を飛び出して行くか、それはさ

て置き此際に於ける一億圓の増収が農村の人気引立の上に、極めて良い影響を及ぼしてゐることは見逃せない。

明朗な氣分溢る、鐵鋼界

各社一齊に黒字、増配の好調

昨年八月頃からの爲替相場の急落による外註品の奔騰と、インフレ具現、關稅引上げそれに滿洲事變に端を發して、我國の國際場裡に於ける立場の變化に伴ふ國內軍需品工業の勃興等によつて、國內製鐵鋼界は昨年下半年より俄然好轉を示し、殊に今期に入つてよりの好調は、益々素晴らしく今や好況の頂點を躍りつゝあるかの感がある。

◇

◇

一昨年即ち昭和六年十二月十三日金輸出再禁止の斷行さるゝまでの兩三年間の鐵鋼界

は甚だしい需要減退で、全く萎微沈滞し、製鐵鋼業者は關東鋼材組合、鉄鐵共同組合等のカルテルに依る統制の強行と、限産又限産と極的の限産強行に依つて辛ふじて不況切抜けの方策を策し乍ら、尙巨額のストックの重壓に呻吟したものであるが、金輸出再禁止を轉機として、漸次好調に轉じて以來、各般の好條件は専ら業界の恢復に拍車を加へ最近に於ては鐵鋼界に何處にも、嘗ての陰鬱はその片影をも止めず、文字通り轉手古舞の多忙の中に、明朗なる氣分が溢れてゐる。

昭和五六年頃の鐵鋼界は惨めなもので、全く萎微沈滞不況のドン底にあつた、鋼材にあつても鉄鐵にあつても、共に統制合理化に主力を注ぎ、生産販賣の統制に狂奔したるにも拘らず、金輸出解禁に併行或は隨伴して遂行された解禁政策、即ち消費節約、緊縮政策の下にあつた當時に於ては、極端なる需要減に伴つて、鐵鋼價格も低落の一途を辿り、鐵鋼業者はオール赤字の採算に苦吟した。

併し一度好調の波に乗つて以來の鐵鋼界の躍進振りは、不況の急坂に轉落した時と全く正反對に、目覺しき足跡を残して今日の活況に至つてゐる。次に示す關東鋼材組合の丸鋼ベース及び鉄鐵共販會社の製鋼用鉄鐵賣値を見れば、この間に於けるその足跡の一部を悉知しよう。(噸當り單位圓)

昭和六年	昭和七年
十一月	十一月
十二月	十二月
一月	一月
二月	二月
三月	三月
四月	四月
五月	五月
六月	六月

七月	五月三
八月	五四
九月	五六
十月	六三、六六
十一月	六八、七〇
十二月	八五
	八七
	九四

昭和八年	丸鋼	鉄鐵
一月	九七	
二月	九七	
三月	一〇〇	三九、五
四月	一〇二	
五月	一〇二	
六月	一〇三	

この賣値の動きは、同時にその間に於ける需要の増減をも物語つてゐる。即ち鋼材にあつては、金輸出再禁と、之を轉機としたインフレーション政策に依る先行見越で、昨年一二月は俄に需要を増加した。只三月乃至五月には上海總攻撃と、五・一五事件を容れて客觀的狀勢の悪化を懸念し、需要の中絶を示した爲めに六、七兩月の賣値は、再禁止當時と同値頃に引下げられた。

然しこの間と雖も一般の需要力は涵養されて、八月に入り爲替相場の急落で外註奔騰

國內賣値昂騰、情勢の沈靜に至るや直ちに需要は旺盛を極め、九、十月に至つて、殺到的の需要を示した。この兩月に亘つて賣値が五十六圓から八十五圓に迄躍進してゐることとは、その消息を物語るものである。昨年九月以降の需要増加は、本格的なものとなり今日依然として持續されてゐる。

◇

◇

一方鉄鐵にあつても、再禁前その販賣値は二十七圓で、當時實賣りには二十三、四圓の安値から傳へられたが、再禁後は漸次その販賣値が嚴守されるに至り、勿論鋼材程の敏感さはないけれども、昨年八月に至つて關稅引上げの拍車と、鋼材界の躍進、鑄物界の好調に依つて、之亦本格的な好調に入つて以來需要の漸増は、嘗て國內一ヶ年分の需要量と稱されたストック六十萬噸を擁した鉄鐵も、今日では既に品不足を豫想され、さきに成立したる日印鉄鐵の協定に依り本年度は約二十萬噸の鋼鉄輸入に待たねばならぬ

程の活況振りである。

斯くて需要の激増に應じ、鐵鋼界が嘗て強行した限産を隨時緩和し來つたことは勿論である。既に今日では鉄鋼共に出来るだけの増産に努めつゝある。

この結果は直に各製鐵鋼會社の業績に現れ、昨年下半年決算に於ても殆ど各社共に相當の利益を計上し、増配したのも少くなかつたが、今年上期に於ては愈各社の業績素晴らしきものあり、日本鋼管の利益四百萬圓の豫想を筆頭に、一齊に黒字となり、増配は確實の状態となり、各社を通じてこの好況は業界を明朗そのものゝ氣分で蔽つてゐる。

我世の春のセメント界

各社擧つて増産計畫

目下のところ懸値なしの好況に恵まれてゐる事業は、セメント製造工業であらう。元

來セメント工業はその性質上、大体に於て一般財界の好況不況に追隨して推移してゐるので、昭和七年早々は、金再禁止の景氣見越しに依り、一時活況を呈したが、間もなくその反動を受けて、再び沈衰状態に陥つた。

然も齋藤内閣出現に依り、その時局匡救事業が開始されるに至つて、七年九月以降に於て眞に見直した觀を呈し、此の頃を境界に業界は本當に立直り、インフレ景氣の浸透が豫想せられると共に飛躍的進展振りを示し、今年に入つて愈々活況の本格的なものを出現するに至つた。

◆ ◆ ◆
 昨年中の内地出荷状況を月別に示せば、大体以上の推移を窺ふことが出来る。

一月	二一三、七六九	三三二、三六〇
二月	二四六、四七四	六三、一三〇

(單位噸、△印減)

三月	二九一、六五二	△二五、五九四
四月	二六四、三六八	△二六、五九二
五月	二九〇、六七三	△二六、三二四
六月	二二六、九六〇	△三、三一〇
七月	二四一、四八八	二二、一二五
八月	二七四、八一九	一五、八二八
九月	二九一、二八七	八、八二四
十月	三四九、〇八二	六一、七六四
十一月	三三〇、三六四	五六、五六五
十二月	三二〇、四八五	四六、五九七
計	三、三二一、四二一	二四五、三八三

右の如くにして好調裡に越年したセメント業界は、今年三月に至つて果然未曾有の好業績を示してゐる。即ち生産高に於てセメント四十一萬一千五百八十四噸、クリンカ

一四十萬二千九百七十六噸で、之を前年同期に比較するときは、各約二割五分の増加を示し、一方出荷高は四十三萬三千二百五十九噸で、昨年年同期に比すれば、實に三割六分餘の激増である。

更に契約高に至つては優に二倍となり、斯くて在庫高はセメント十二萬九千餘噸、クリンカー五萬八千餘噸といふ稀有の在庫減を現出し、月産能力に對し、僅に二割餘といふ最低在庫の狀況を示すに至つた。單に在庫高の點からのみ見ても、昨年三月は三十萬五千噸で、今年三月末の豫想在庫は三十五萬乃至四十萬噸と推測されてゐたのから見ても、その好轉振りの如何に華々しいものであるかと知られる。

◇

◇

以上の如くセメント界好轉の原因は、一つに土木事業の進展にあることは、昭和七年中の出荷の用途別により明瞭である。即ち六年度に比し、道路橋梁は十五萬五千餘噸の

増加、港灣土木工事一般は、各二萬五千噸を見てゐる。更に又一般景氣を最も鋭敏に反應する販賣店及び小口需要に於て、約三萬二千噸の激増を示してゐるのは、何んといつてもインフレ景氣の浸透を物語るもので、今年に入つて地方土木事業の進捗につれて愈々本格的活況を示してゐる。

一方内地の販賣統制が完成の域に達したので、販賣業務の基礎は益々強固となり、市價を相當に維持することを、各社共に需要の増加に恵まれつゝ、利益の増加を享樂することを得たのである。但し輸出向は各種の通商障壁の結果思はしからぬものがあるが、何といつてもセメントは其性質上内地需要が主であるから、内地さへよければ實は輸出などは大した問題ではないのである。此點に於てセメント業界は、下期に於て突發事變の偶發せぬ限り、土木事業の進捗と共に益々活氣を呈すべく、農繁農閑の季を交互にして、需要は増加の一本調子を辿るであらう。

さればセメント業界は、今猶表面五割の生産制限を行つてゐるにも不拘、一方に於ては各社擧つて増産計画を進めつゝある状態で、今年中には能力の約二割が増設擴張されるであらうとの見込みである。業界は今や我世の春を謳歌して居り、建値の如きもそろ／＼引上げられるであらう。恰も石炭の値段が騰勢を示して居るので、然るべき機会にこれが理由となつて、セメントの値段は引上げられるのも遠くはあるまい。

總括して今年下期のセメント各社は、概して増配疑ひなしといふところに見當がついて來たやうである。

主要國の金利

七月一日引下げられた日銀新利率を同一日現在の世界主要國中央銀行のそれと比較すれば次の如し(單位分)

日本銀行	三・六五
イングランド銀行	二・〇〇
ニューヨーク準銀	二・五〇
ライヒスバンク	四・〇〇
フランス銀行	二・五〇
オランダ銀行	四・五〇
ベルギー銀行	三・五〇
インド帝銀	三・五〇
スペイン銀行	六・〇〇
イタリア銀行	四・〇〇
スエーデン銀行	三・五〇
スイス銀行	二・五〇

日銀金利沿革

日本銀行商業手形割引歩合は昭和二年以來左の如き變更を見てゐる

二年三月九日	一錢六厘
三年十月十日	一錢五厘
五年十月七日	一錢四厘
六年十月六日	一錢六厘
同 十一月五日	一錢八厘
七年三月十二日	一錢六厘
同 六月八日	一錢四厘
同 八月十八日	一錢二厘
八年七月一日	一錢

昭和八年六月三十日印刷
昭和八年七月五日發行
每月一回發行

編輯兼印
廣島市銀山町一一
森 秀 雄

印刷所 中國新聞社印刷部
廣島市上流川町二番地

發行所 廣島市銀山町一一
鎌田 株式 店
電話代表 五五五〇番

終

吉